

Takashima Toujyu Kai

会報



No. 34

2024. 1. 18

高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740 (32) 4156
<http://takashima-tojukai.com/>

高島が輩出した二大教育者

中江藤樹先生と清水安三先生

初代会長 上田 藤市郎



論語の巻第八に、「子曰、有教無類（だれでも教育によって、立派になる。）」という言葉がある。

人間は、時代を超えて常に争いを繰り返し、かけがえない命を奪い、長年にわたって築き上げた文化を破壊し続けている。この現状を見かねて、各国の代表が集まってみても、国々の意見がまとまらず、有効な解決策を見いだせないままである。戦争にまきこまれていく家族の悲しみはあまりにも甚大で、子どもたちがおかれている状況に心が痛むが、どうすることもできない。

多くの人々が待ち望んでいる平和な社会はどのようなになれば実現し、それを維持していくことができるのだろうか。その解決策はつまるところ、孔子のいう「有教無類」なのではないかと思われる。この解決策は、とてつもなく時間がかかることであり、理想的すぎるように見えるけれども、本当は最短の道であるようにも思われる。人の心が変わらなければ、社会は変わらない。

四百年も前の人である、中江藤樹先生の生き方は、今もなお、教育者として受け止められている。先生の思想は幅広く一言では言い表せないけれども、ひとり一人の「心の育て」というものに重点がおかれている。自ら藤樹書院を開き、直接、若者や村の人達に、人の生き方を語り、手紙のやりとりを通じて遠方の者への指導に当たった。その方法は、先生自身が厳しく自分自身の心を見つめる態度を保ちながら生涯を過ごしておられることである。まさに自反憤獨そのものであった。戦乱が休止した江戸初期のことであるから、世の中の平安は人々の願いであり、人間の「心の育て」が社会の平安につながるという確信があっただろう。自分の仕事は、この道を弘めることであり、天命であるという自覚をもっておられたのであろう。

この藤樹先生を敬慕して尽きなかった人が、清水安三先生である。先生は、六歳の時（明治三十年）に藤樹祭に参加して感動し、「藤樹さんになつてこまそうか」と語っている。初志を貫いて、同志社大学を卒業後、宣教師として中国に派遣され、北京市の朝陽門外に崇貞学園を創立し、藤樹書院のような学園にしたいと言った。当時の貧民街の少女たちに勉強を教え、仕事を教え、両親を

通じて社会を変える事業を行った。しかし、一九四四年の敗戦ですべてを失って帰国した。にもかかわらず、不死鳥のような精神で、東京に桜美林学園を創立し、先生の教育立国の精神は今に引き継がれている。

「学而事人（学んで人に事える）」は、人間は自分のためばかりに学ぶのではなく、人に奉仕するように努めるべきであるという趣旨である。ここにも、個人の心磨きが社会の改革につながるという視点がある。清水安三先生は、戦争の悲惨さを骨髄まで体験した人で平和への思いは深いものがあつたと思われる。激動の二〇世紀に中国、日本の両地に教育者としての信念を貫きとおし、自らは何も求めず神から与えられた使命を果たすことに邁進された。

江戸時代と明治から昭和にかけて、この高島の地に生まれ、前者は天命を、後者は使命を自覚して教育こそが、人を育て、社会を変える大きな力であることを確信していた二人の教育者は敬服するに余りある。私たち後世は、今どういう思いでこの巨人の遺志を伝えていくべきか思いを深くしたい。それぞれの関係者の努力で、少しずつ子供たちに浸透していつているが、このふたりの教育者をいつも併せて語っていく責務が、私たちに課せられている。